



1階 南側スタジオ大/北側ロビーに反転した場合、北側ロビーでは子ども向けの工作教室と映像展示、南側スタジオ大ではパフォーマンスアートが進行中、階段奥では関連ワークショップが行われている



2階 ロビー、視線が通、通風の確保がみえるロビー、南側に並ぶコーナー、それぞれ天蓋があり居心地をつくる。ガラスの材質には津久井産材を使用

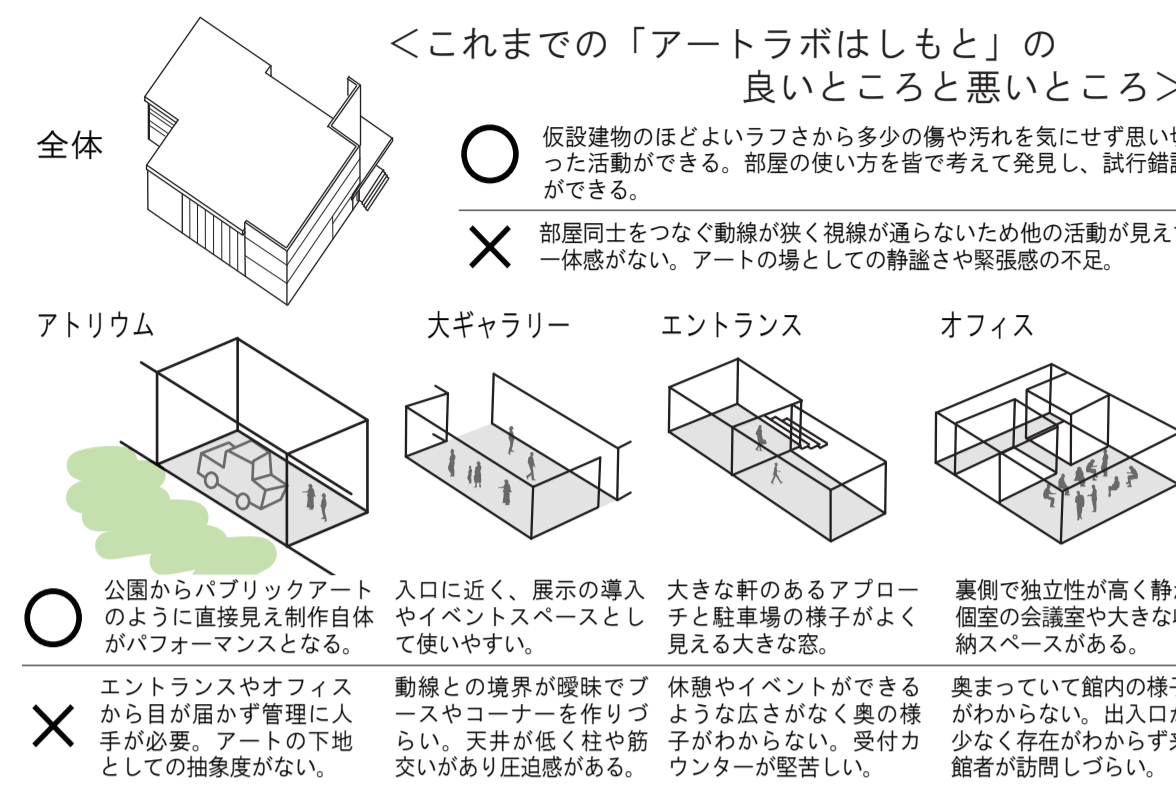


1階 南側ロビー/北側スタジオ大で使う場合、北側スタジオ大では作家による大壁画を使った公開制作、南側ロビーでは学生の作品展示、意図はテラスや公園にも家具を出し開放的なラウンジに

【設計コンセプト】

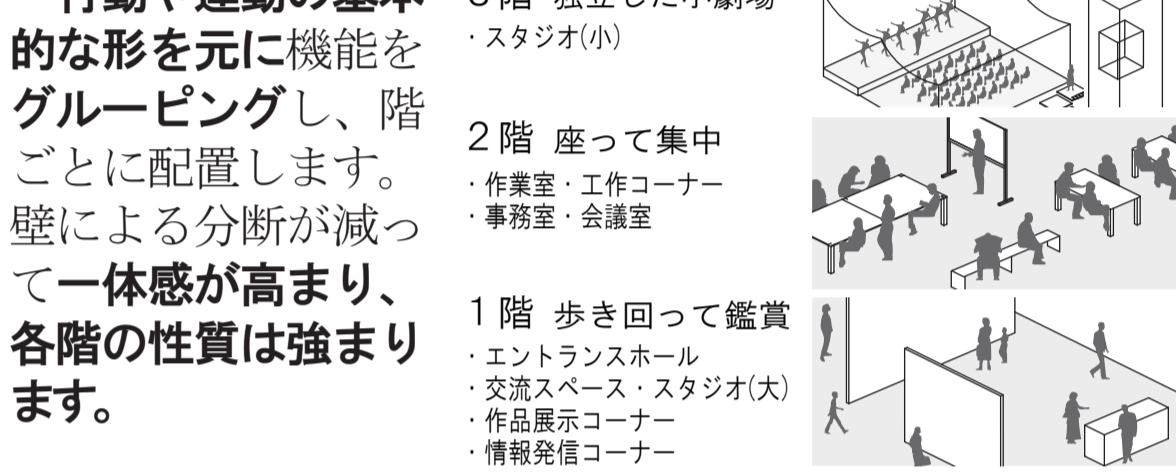
1. 能動性を発展継承するうつわ

「アートラボはしもと」のこれまでの活動を支えてきたものは、何よりも関係者の「情熱＝能動性」だと思えます。この能動性を喚起してきた状況や仕組みを分析し、発展継承するうつわを考えます。



【フロアの想定ゾーニング】

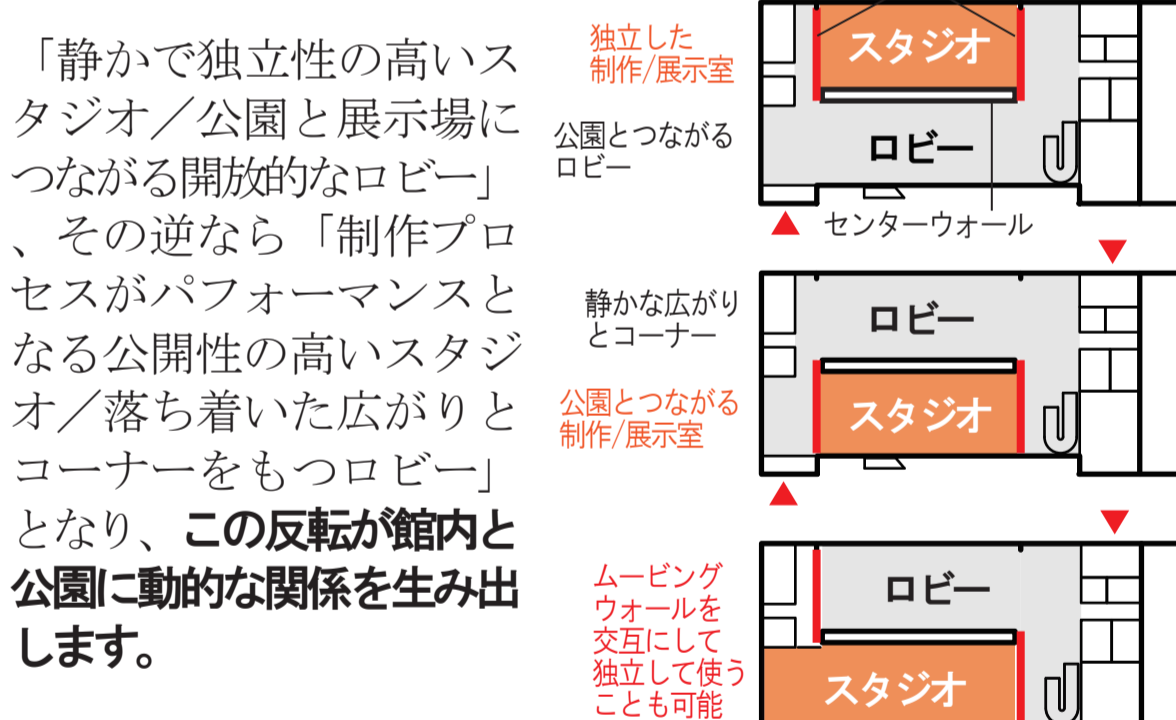
2. 壁の制約を最小限にするグルーピング



【設計コンセプト】

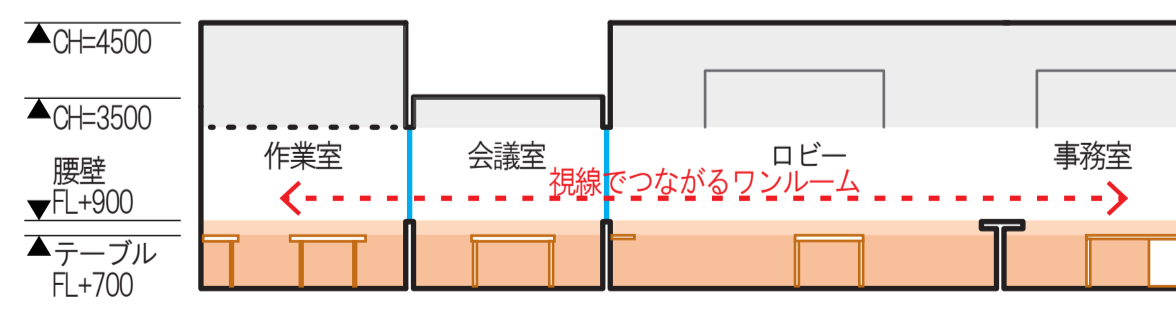
3. 能動性を喚起する各階の仕掛け

<1階>反転するスタジオとロビー
建物中央東西方向の「センターウォール」と、その両端で南北に動く2枚の「ムービングウォール」の組み合わせで、開放的な南側と落ち着いた北側、どちらをスタジオ/ロビーとするか選択できます。



<2階>モノ・コト・ヒトが見えるワンルーム

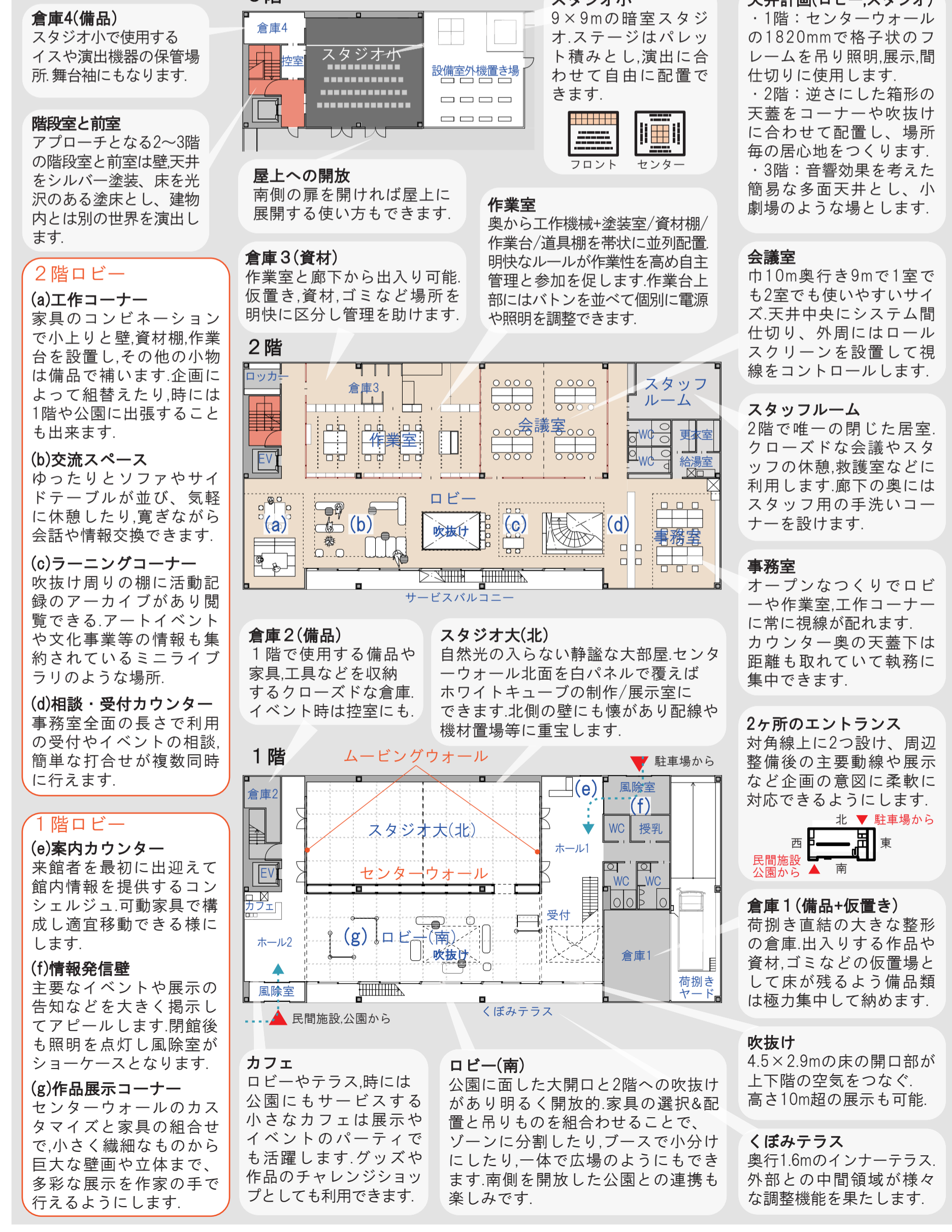
座位が基本となる諸室を集めてテーブルや腰壁の高さをそろえ上部を極力開放することで、異なる活動や作業にそれぞれが集中しながら、互いの姿が見え、感じられる一体感をつくります。ロビーにはその様子が一挙に把握できる一覧性があり、体験や創作への動機を生み出します。



<3階>もう一つの建物としての小劇場

防音と音響がコントロールされたブラックキューブです。アプローチの仕上や天井形状を独自のものとして、別建物のような独立性をつくります。また屋上に開放できることで、演目やイベント利用にバリエーションが生まれることを期待します。

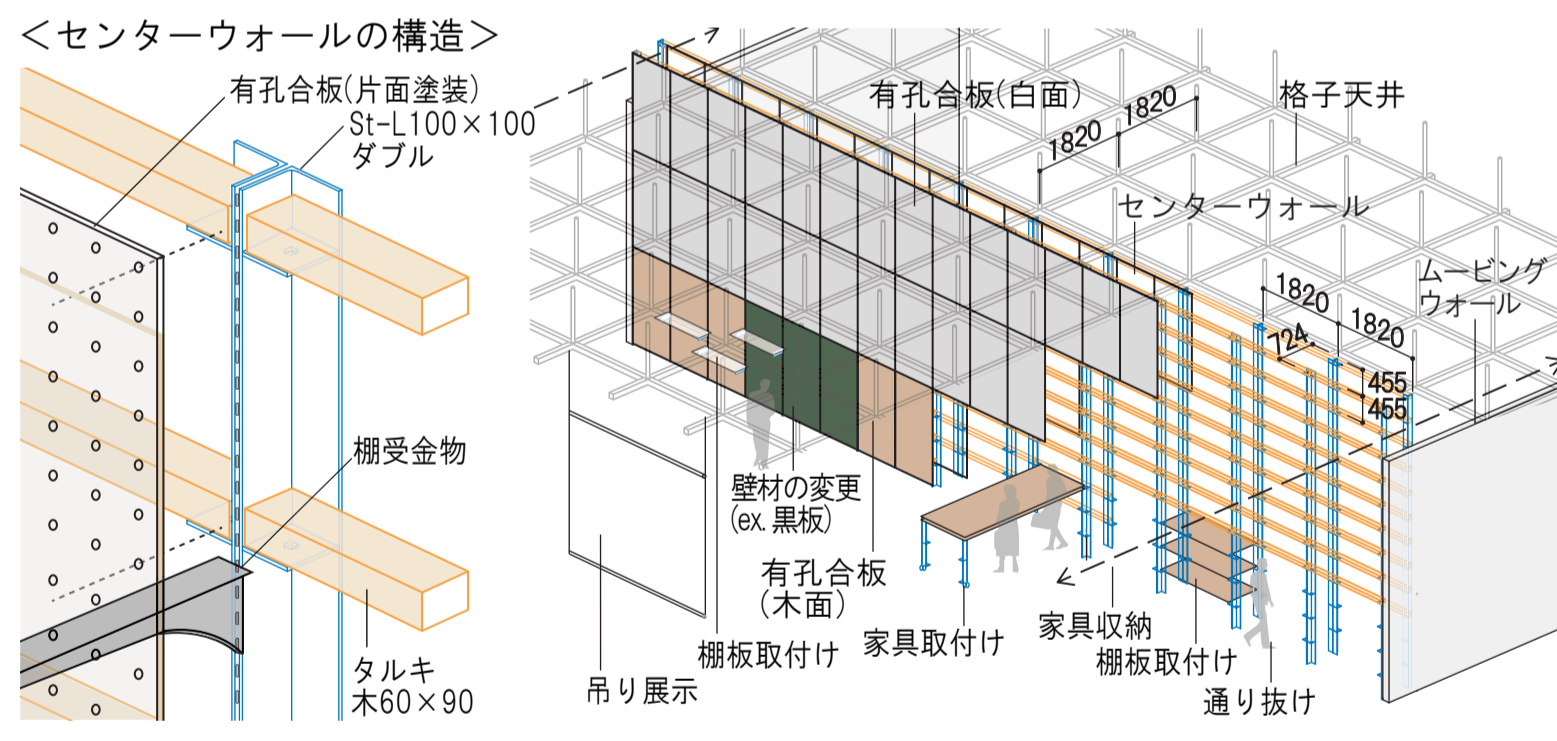
各階平面図 A1 S=1/300



【プログラムに与える効果】【持続可能な施設運営】

4. アクティブな固定壁と白く重厚な可動壁

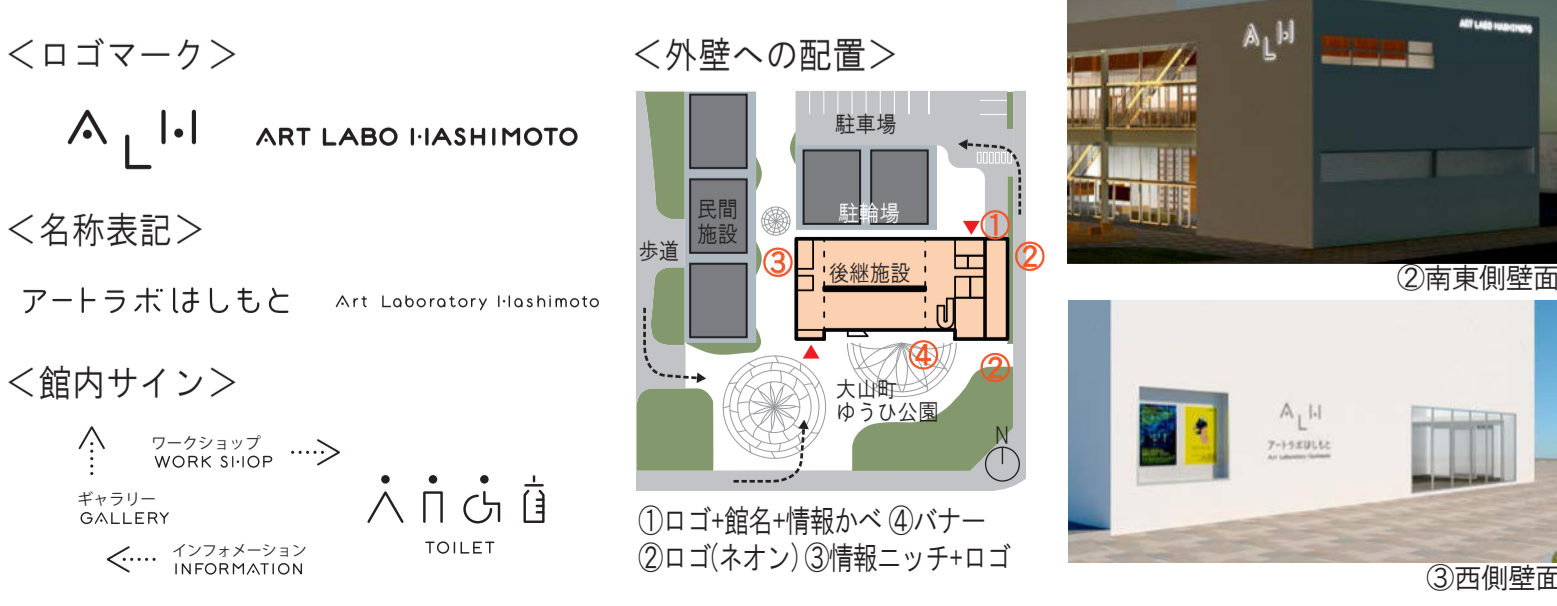
1階中央東西方向のセンターウォールは柱と梁を両面から挟む太鼓張り構造で懐が500mmあります。下地はスチールのL型材を2つ抱き合わせた縦地に木材を渡して横地とし、片面を白塗装した有孔合板を張って仕上げますが、ビスの抜き差しで簡単に脱着、交換ができ、面材の改変や下地と懐を利用した様々な使いこなしが可能です。一方、南北方向のムービングウォールは美術館仕様の分厚い可動壁。表面はクロス張りで目地がなく、巨大な壁面がフロア全体の抽象度を担保します。



【ヴィジュアルアイデンティティ】

6. 親しみと強度を併せ持ったグラフィック

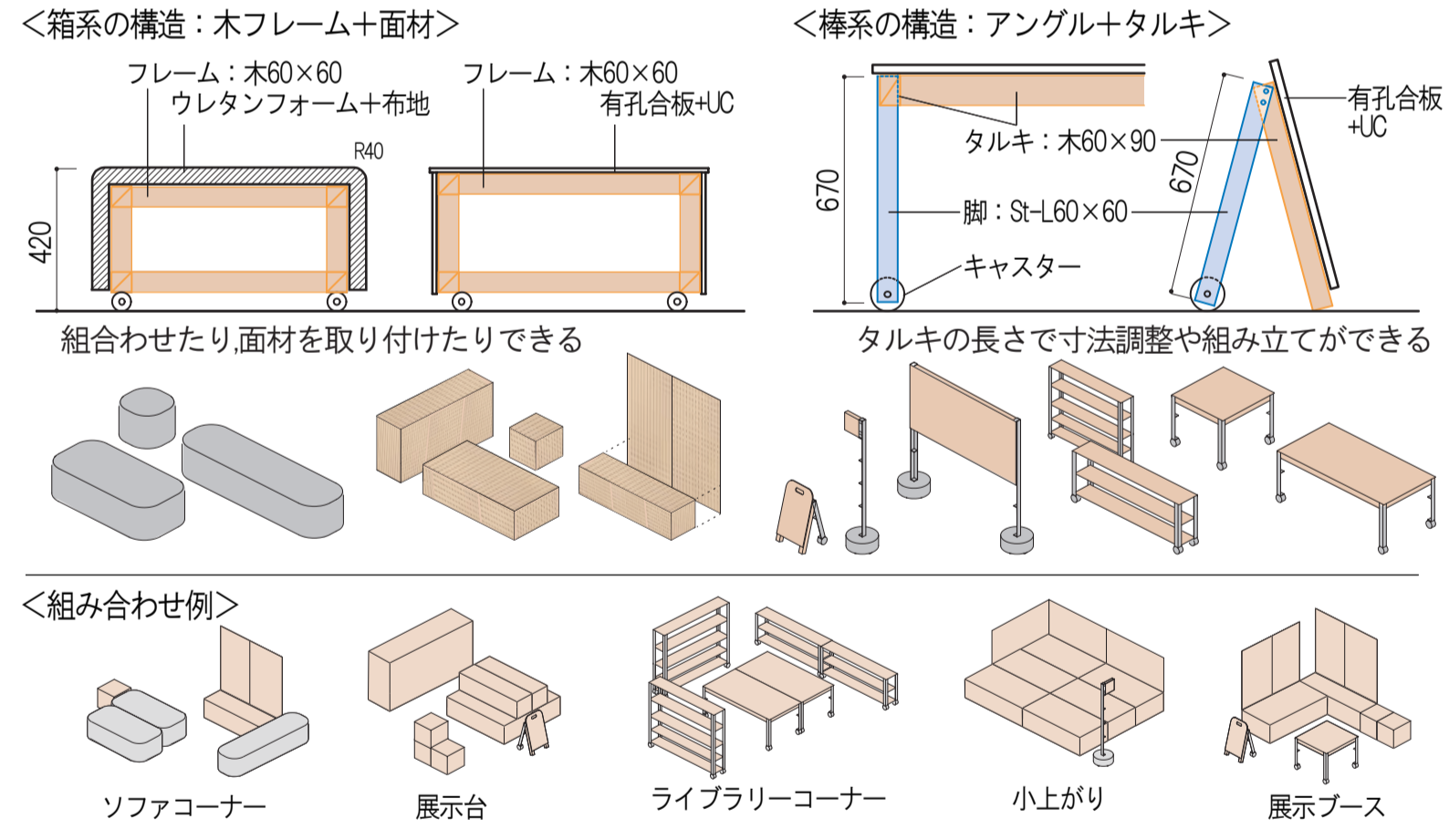
周辺環境や来館者像の多様さに応える強度と親しみを持たせます。ロゴは文字の横線をドットに変え、配置でキャラクター性を持たせています。ラインとドットのシンプルな構成は館内サインにも適用でき運営に応じて展開させることも容易です。外壁にはこれらを各環境に合う方法で配置します。



【プログラムに与える効果】【持続可能な施設運営】

5. ほどよくカスタマイズできる2系統の家具

「箱系」と「棒系」2系統の家具で能動的な運営を支えます。箱系はイベントや展示の企画に応じてブースやレセプション、休憩コーナーなどを適宜構築できるもの、棒系は細かな寸法調整や運営の機微に合わせた制作が容易なもので、それぞれに程よいカスタマイズ性を持たせます。



【公園との連続性】【民間施設との連携】

7. 公園とコミュニケーションする奥行きのある開口

南側は奥行き約1.6mの大開口とサービスバルコニーで公園と対面します。セットバックの懐で日射を制御してブラインド等での閉鎖時間を減らし透明度を保ちます。3層のグレーチング床はメンテナンスだけでなくイベント告知のバナーや季節の飾り付け、公園を一体利用するワークショップなどにも使用できます。

